

脳死問題に対する意見と日常レベルの生命感覚

松尾 香弥子

(お茶の水女子大学博士課程OD)

【研究の目的】

いわゆる脳死・臓器移植問題において、日本で臓器移植の実施が遅れている理由として、しばしば「日本人に特有な生命観」があげられる。もしこの問題についての判断が、死生観や生命概念等と関連があるならば、日本人であるかどうかに関らず、脳死を人の死とすることに反対の者と賛成の者とでは、その持っている生命概念等に違いが見られるはずである。例えば、死の定義としての脳死に反対の者は賛成の者よりも、生命を持っていると考えるものの範囲が広い、等の傾向があるかもしれない。本稿ではこの問題の一部について検討する。すなわち、生命概念等の中に含まれると考えられる事柄のうち、より日常的な場面における生命感覚について、物質に命を認めたり、物を捨てることを躊躇（その物にヒト的なものを認めているためと解釈できる）したりすることについて、検討した結果を報告する。

【方法】

被験者：首都圏のある中堅大学の一般教養心理学受講者 126名（男性56名、女性70名）。予備知識は特に与えない。

方法：B4の質問紙1枚を一斉に配布し回答を求める。質問項目のうち、本研究で分析したものは次の通り。

○この問題に対する意見をたずねる項目

(1)脳死を人の死とすることについて、どう考えるか。
（「賛成」「反対」「どちらとも言えない」の3つから選び、その理由の自由記述を求める）

(2)臓器移植について、どう考えるか。（「どちらかと言えば推進派」「どちらかと言えば慎重派」「どちらとも言えない」の3つから選び、その理由の自由記述を求める）

○物質に命・心を認める傾向等に関する項目

(3)職人さんが心をこめて作ったものには命が宿っていると思う。

(4)たとえ(3)のようなものであっても、要らなくなればいさぎよく捨てるべきだ。

(5)捨てるべきだと思いつつも、古いものをなかなか捨てられない。

(3)から(5)については、「とても思う」から「全く思わない」までの7段階スケールに評定を求める。(4)は

反対項目である。

【結果】

(3)から(5)までの項目につき（(4)は反対項目）、「とても思う」が最も高くなるようにそれぞれの目盛りで1～7点を当て、合計したものを指標とする。この問題に対する意見別の平均点を表1にまとめる。

表 1

	臓器移植			平均
	推進	慎重	どちらとも言えない	
脳死を人の死とすること				
賛成	14.6	14.9	14.3	14.6
反対	16.1	16.8	15.7	16.2
どちらとも言えない	14.8	15.3	16.5	15.3
平均	14.8	15.5	15.6	15.2

(点)

各群に有意差はないが、死の定義としての脳死と臓器移植の受容に非積極的な者の方が、やや点数が高いようである。

また(5)の項目だけに限っては、脳死についての意見の違いによって、5%水準で有意差が見られ、平均値は「賛成」=4.8、「反対」=5.8、「どちらとも言えない」=5.4であった。Newman-Keuls 法による対間比較では、「賛成」と「反対」の群の間で有意差が認められた。脳死を人の死と認めることに反対の者は、物を捨てられない傾向が高いという結果である。

【考察】

本研究では脳死に対する意見と生命概念との間に何らかの関係の存在を示唆する結果となった。ただ、この差異が臓器移植についての意見ではそれ程には強く表われていないことにも注意が必要であろう。

また、質問項目も、これだけでは不十分であり、例えば(4)は都市部の住宅事情を反映する可能性が高い。また(5)は、あきらめのつけにくさや判断の慎重さなどの性格傾向等とも関係がある可能性もある。さらに項目数を増やして検討する必要がある。

脳死・臓器移植問題への心理学的なアプローチはあまり見られないが、ピアジェに続く生命概念の研究は、この問題に対して心理学の立場から提言する際、拠り所とできる領域の1つであると思われる。